

〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(42)〉

## 学内シンポジウム

「保育現場と協働して学生を育てる」を振り返って(2)

佐治由美子

五月号掲載の学内シンポジウム第一報では、保育者養成のイメージを大学と現場とで共有することに向けられた現場の方々の提言内容の前半部分、そしてそれへの応答としての参加者の感想を、併わせて紹介しました。

今回の第二報は、本シンポジウムの後半部分の主な発言をお伝えし、最後に昨年五月と九月の二回にわたるシンポジウム開催から、私どもが学び得たことを振り返ってみたいと思います。

### シンポジウムの実際

シンポジウム後半の発言者の所属は、次のとおりです。

・板野昌儀「愛育養護学校」

・私市和子「お茶の水女子大学（以下、お茶大）」

附属いずみナーサリ―

・高橋陽子「お茶大附属幼稚園」

・佐藤キミ男「障碍児放課後クラブはすねっこ」

・浜口順子「お茶大幼保プロジェクト」



板野 「総合的保育者」という言葉がありましたね。

どういう名目であれ学生さんが現場に来て、人とのかわりを体験して帰っていく。受け容れたい子どもの行為を目の前にながらもそこにつき合い続ける、ということもある。実習したことが、学生さんにとって、いままでにない自分に出会う、そんな入り口に立つような体験になっていくてくれれば、と願っています。

自分自身もいつもそうありたいと思っています。子どもたち一人ひとりと向き合うたびに、一から出会うことになる。一つのことと同じようには通用しない。

この子の幸せとあの子の幸せは全然違う。そのように一人ひとり違う子どもたちが、遊びの中で分かち合えたと感じてくれるような体験ができると、そこでの関係は生きてくるのだと思います。その実感というのを、学生さんにも感じてもらいたいです。

佐藤 いま日々考えているのは、受けとることと応え

ること。観察という入り方でも現場に身を置くということは視覚だけではすまないことがあるとしたら、どんな覚悟をもつてそこに入るかということが、自身自身に問われてくることになる。そこにその人がいかに真摯に向き合えるか、ということになっていくと思う。

実習の中で子どもと関係がつくれなくて、離れて見ているという学生さんの姿もあります。そこでどんなふうに過ごしているのか、何を感じているのか（そこでの自分をどのように受けとるか）、そのことを考えていけば実習の仕方そのものも変わってくるのかもしれない。

一回きりであっても、その出会いの中で子どもと学生さんがお互いに何を残し合っていくのか、ということが実習の大事なポイントになっていく場合もあると思います。そのあたりをできるだけ大切にしていきたい、と思っています。

私市 私には思いついたら始めてしまうというところ



があるので、おもしろいことや楽しいことを子どもと一緒に見つけてみようという気持ちで保育を続けてきました。

お茶大の学生さんは、観察が上手で子ども理解もよくできていると思います。ただ、実際の保育に入る時になると、子どもとの距離をどのくらいとつたらいのか考えてしまうところがあるようです。子どもをよく見ているから、慎重になって引いてしまうのかもありません。やはり、その見極めが大事なかなと思います。見守るだけでなく、自分でも遊んでみるということが必要かもしれません。子どものほうから何かに気づいて、そこで関係ができていくこともあるでしょう。一緒に遊ぶことで、学生さんにとっても共感できるチャンスが生まれるのではないかと思います。

**高橋** 子どもと一緒に楽しんじやうという話に私も通じるところがあつて、自然の変化とか子どもが目を向けているところに気づける自分でもいたいなと

思っています。保育者になるからとか、母親になるからとか、何かのためにということではなく、自分自身が感じたことを一緒に感じている人がいるということを実感として感じられる、そんな気持ちをもっていてほしいなと思います。

一緒に保育をしていても保育者間で子どものとらえ方が違うことに気づくことはあるし、保育に正解というものもないと思います。同じ場面にいってもいろんな感じ方があるということ、知ることができるのが貴重だと思っています。

学生さんが実習の授業で振り返りをする時などに、いろいろな感じ方をする一人ひとりであつていいのだろうと思うし、それぞれ違う感じ方をしていても、同じ空間にいるということを感じる人であつてほしい、そんなふうに思います。

**浜口** 四年間幼保プロジェクトを行う中で、初めて附属の現場との関係ができたと思います。これを出発



点に保育者養成を考えようとしてきましたが、ここに来て学部的一年生が実習体験を経て大きな変化を遂げていることに私たちは気づきました。そこで、養成イメージを現場の方々と共有してみたいと思うようになり、このようなシンポジウムを企画しました。

皆さんのお話をうかがって感じたことをまとめてみたいと思います。

(1) お茶大には、子どもとかかわる体験自体が少なく人間関係が苦手という学生がかなりいます。そういう学生の気持ちを実習でほぐすという意味もあります。子どもに出会ってまず驚く体験をしてほしいという思いがあります。いい経験になればいいのですが、傷つく学生も出てくる。そこをどうフォローしたらいいか、というのも大事な課題で、やっぱり、やってよかったという学生の思いでつなげていくことを心がけねばならないと思います。

(2) 現場の方々のお話をうかがって、保育者自身が、

子どものことをすっかりわかった者として指導するのではなく、わからないままに手探りしながら出会っていく、というところに共通点があったように思います。子どものことをいつかはわかることができるように、というあきらめないあり方が提示されたようにも思います。保育者養成は、人を育てるのか専門性を育てるのか、この二つが調和しうるのか、この点はこれから考えていかなければならない、と思っています。

(3) 学生が、自分のつたない感想をしつかり受けとめてくれる大人に出会うことにも大きな意味があると思います。この厳しい社会の中で子どもを守る立場で社会人として生きている大人がいる、ということを知る大事な機会になるでしょう。学生自らが疑問をもち考えていく中で社会的視野を広げていくということも、保育者養成に盛り込んでいきたいです。その一歩として、子どもだけでなく大人と出会うということを大切にしていきたいところです。



## 二つのシンボジウム<sup>注</sup>を経て

少子化の流れの中で育ってきたいまの大学生が、保育を専門に学ぼうとする者であっても、子どもに触れる体験を豊富にはもち得ていないという傾向は、お茶大に限らず広く認められるところでしょう。

しかし、このような社会現象があつてなお、保育を学ぼう、保育を目指そう、と自らの目標を掲げる若者たちが少なからずいるということに、保育者養成に取り組む私たちは、希望をつないでいきたいと思ひます。

幼保プロジェクト・リーダーの浜口によるまとめの中に、「そういう（子どもとかかわる体験自体が少なく人間関係が苦手という）学生の気持ちを実習でほぐすという意味もありますが、子どもに出会つてまず驚く体験をしてほしいという思いがあります」という発言があります。

学生たちの気持ち、養成側の教育的配慮として

「ほぐす」こと以上に、学生たち自らが「驚く」体験をするような学習環境を用意するところ、職業的保育者養成に特化しない総合的保育者養成の特色があるといえるでしょう。

学生たちが資格取得のためだけの実習体験を積むのではなく、実習を通して、子どもとは何か、大人とは何か、私とは何か、保育とは何か、など……学生自身の課題を投射せずにはいられないような人との出会いを体験していくこと、そこに子どもにかかわつていく人材の養成としての総合的保育者養成の意義があるように思ひます。

しかし、浜口の発言にもあるように、子どもに触れる体験がそれまでに少なかった学生は、子どもに「驚く」以前に子どもに「傷つく」場合も少なくありません。子どもに対して抱いていたイメージと実際の子どもの間にズレが生じてしまう場合があるからです。

このような困難に寄り添いつつ学生を育てていくた



めに、学生が子どもへの関心を手放してしまわないよう支える働きが、養成の側に必要とされることになります。この意味において、総合的保育者養成には学生の臨牀的なかかわりが求められるように思います。

ここでいう臨牀的かかわりには、学生一人ひとりを一人の教員が支えるという形だけでなく、複数の学生が複数の教員と向き合ったり、学生同士が教員を媒介に支え合ったり、さまざまな形態が模索される可能性があるのでしよう。保育における臨牀的かかわりについては、幼稚園や保育所で先生あるいは保育士と子どもたちが支え合う形が多様に展開するその事実から、私たちは多くを学ぶことができると考えます。

最後に、「保育者養成は、人を育てるのか専門性を育てるのか、この二つが調和しうるのか」という課題が残されていることを、確認しておきたいと思います。

保育者を「育てる」のが保育者養成であることは自明である中で、学生が自ら育とうとしている主体であ

ることは、専門性について議論する際にも忘れずにいたいと思います。

倉橋惣三は、『育ての心』<sup>注2</sup>の序文の冒頭で「自ら育つものを育たせようとする心、それが育ての心である」と述べました。この「育ての心」は幼い人たちが育てる心にとどまらず、育ちゆくすべての人たちを広くおおむ保育の心を示していると思います。保育者養成に取り組む私たちも、「育ての心」を養成の心とし、この厳しい社会にあつてなお、自ら育とうとする学生の歩みを、ゆるぎなく支えていくものでありたいと思います。（お茶の水女子大学幼保プロジェクト）

#### 注

- 1 二つのシンポジウムとは、保育学会自主シンポジウム「女子大における総合的保育者養成の試み」と学内シンポジウム「保育現場と協働して学生を育てる」を指している。前者については、『幼児の教育』第一〇九巻第二号および第三号を、併わせて参照されたい。

- 2 倉橋惣三文庫3『育ての心（上）』フレーベル館 二〇〇八年